

ブアー テアー クー ポーマア (親感謝の仏門)

私は18歳より13年間日本で勉強し、社会人を経験しました。年には一回故郷のラオスへ帰って、二週間程度友人・家族と過ごしました。気がついたら、日本の習慣・文化を理解して、日本での成人正式等を行いました。故郷のラオスのことに関する行事を何も実施していません。今年の春にラオスに戻り、ラオス人男性は一生のうちに一度は仏門に入り、寺院にて修行する「ブアー テアー クー ポーマア」習慣をしました。

今回、私の体験及び読んできた資料に基づいて体験談を書かせていただきます。はじめに、ラオス仏教はスリランカ、タイ、ミャンマー、ラオス、カンボジアの各国で多数宗教を占める「上座部仏教 (小乗仏教)」という仏教です。上座部仏教はマウリア朝アショーカ王の時代にインドから主に南方のスリランカ・東南アジア方面に伝播し、このため「南伝仏教」とも呼ばれています。上座部仏教徒の最終目標は仏陀の域に達することで、そして、人間を苦しめる艱難辛苦から切り離され平穏の世界に至るためには厳しい修行と禁欲で苦悩の根源となっている煩悩や欲望を捨て去る努力となっています。また、上座部仏教徒では、苦しみの原因はこころの執着で、そしてこころの執着を断ち輪廻を解脱するための最も効果的な方法は、出家をし、聖者の生き方をまねぶ僧侶として修行することです。

ラオスの人々の日常生活が仏教と密接しており、慣習も暦も、一般常識までもが仏教カラーに染まっています。ラオスの人々にとって寺院というのは、日本の寺院よりもっと気軽に訪れることができる親しみやすい存在になっています。ラオスの人々の仏教観念として「ヘットブン (ブン: 徳を作る)」というものがあります。ヘットブンの観念は輪廻転生の思想が影響しています。生まれ変わることを前提としているラオスの宗教思想においては低いとされている身分や動物、地獄に生まれ変わることはブンが足りないからだと説明され、現在幸福なのは前世のブンが多いからと説明されています。

仏門 (ブアー) に入ることにより、自分自身、親及び他の人々、仏教という三つグループがアニソン (ブアーによる効果) をもらいます。ここでは、一時的ブアーに対して、自分自身に仏教に対してもっと深く勉強・信仰し、両親や他の人にもブンがたくさん与えます。そして、仏教を次々に伝えることで、仏教が守られます。近年の傾向では、ブアーの要因として主に「成人するため」、「ブンを両親に献上するため」、「宗教的な行為を通して良い仏教徒になる」、「罪の消去」、「配偶者及び家族の死去で、お葬式」、「教育を受けるため」のことが挙げられます。また、ラオス仏教では、正規の構成員である「Phra(プラ)」と準構成員「Nen(ネーン)」で構成されています。プラは 227 シーン (条の戒律) を、ネーンは 10 シーンを守らなければなりません。その中にはもっとも厳しいシーン5、「①性交、②窃盗、③殺生、④悟りを得たと嘘をつくこと⑤禁酒」を守るべくよう義務づけられています。

ラオス仏教の教えによると、世俗の一切を捨てていないものは、出家したとは言えません。欲得の一切から隔絶されなければ悟りを得ることが不可能だからです。僧侶は乞食となって人の捨てた古布をまとい、托鉢によって食を得、雨露をしのぐ程度の宿で休んでいます。僧侶の食事は1日二度、午前中のみ採ることができます。僧侶は女性に触れてはならないし、触れられてもいけません。

私は、親感謝を表すために、タットルーアンヌア（北タットルーアン）寺院にてブアーブラをしました。仏門の期間について1週間から3ヶ月ぐらい、長いほど良いといわれていますが、ブアー（仏門）式とシック式（還俗：僧が俗人に戻ること）の良い日程として、12日間のブラ生活をしました。

ブアー（仏門）式：当日には髪の毛を切り取り、バーシー式をしました。その後、私は白い服を身に包んで、ナーク（川の龍）としてお寺は入りました。3回シムを回って母が私に連れてシムに入り、プラサンカラット（ラオスの仏教団体のトップの僧侶様）をはじめ、21オン（僧侶に対する数字）の僧侶と大勢の家族・親戚・友人の前に約一時間半のブアー式を実施しました。僧衣を受け取ったり、白い服から僧衣に入れ替えたり、シーンを受け取ったり、バート（宅配時、一般の人々から飲食物を受け取るもの）を受け取ったりしました。

毎日の生活：それぞれの寺院のルールによって、生活パターンが異なります。私が修行したタットルーアンヌア寺院には多くの地方から僧侶がいます。さまざまな環境で育ってきた僧侶は、仏教の僧侶として平等の生活を送っています。毎日朝五時に起き、お寺の掃除をしたり、バーを準備したり、僧衣をまったり、宅配準備をしたりしていました。宅配時間は基本的に午前6時より30分程度でした。宅配ルートは4つグループに分けて、寺院の周辺を巡回しています。宅配から戻ってきたら、それぞれのクッティ（僧侶が休んでいる家。僧侶はものを所有してはいけないため、住む表現ではなく、休む表現）に。それぞれから宅配よりもらった飲食物を分けて、プラもネーンもサンジャンハン（朝食）をしていました。お寺によって、宅配しない場合には、お寺まで飲食物を提供します。私が休んだクッティは、タットルーアンヌアのチャオアワー（寺の僧侶長）が休んでいるため、宅配以外にも直接にお寺まで飲食物を提供してくれたことも多く、プラ・ネーンのサンジャンハン後、残っている飲食物を一般の人が食べている習慣があります。サンジャンハン中に、寺の一日スケジュールが知らせて、これによって一日の行動が決まります。

サンジャンハンの後、日にちによりお寺の大掃除か、行事の準備か、寺の修復かをしたりしていますが、私はシーム等を掃除したり、他のブラ・ネーンとの話をしたり、仏教に関する知識を勉強したり、祈りよの言葉を勉強したりしました。僧侶は昼前に一日2回しか食事できないため、午前11時～12時の間にサンペーン（昼食）をしなければなりません。

サンペーンはサンジャンハンより残った飲食物を食べたり、直接にお寺まで提供してくれた飲食物を食べたりしていました。私の体験では、お寺まで提供してくれた飲食物を先にブラが食べて、そしてネーンが食べることでした。タットルーアンヌア寺院の僧侶はまだ学生で、僧侶用学校（高校まで）・国立大学・プライベート学校に勉強しています。私の留学生経験をよく僧侶から聞かれています。特に日本の仏教はどんなものなのかとよく聞かれています。中に日本語を教えてくださいと頼まれたこともあります。その代わりに、仏教のことを私に教えたりしてくれました。サンペーン後、一切食べ物を口にはいけません。お水、コーヒー、ナムオイ（サトウキビの水）、豆乳程度しか飲みません。多くの新僧侶は、この二食のルールが一番厳しいだと感じています。私は特に問題になりませんでした。日本では夜中まで働いて何も口に入れていないこともたくさん体験しました。一日中の時間は殆ど仏教のことを考えて、仏教の資料を読んでいました。太陽が涼む前には、スーモンワイブラ（おとけさまの前に仏教を誓って、祈る）を約30分ブラもネーンも一緒に実施しました。これはシームに集まって、仏教の言葉で祈ったり、罪を報告したりしていました。夜のお寺は早く午後9時ころには既にベットに入り眠ってしまいます。お寺の周辺はとても静かなところのため、落ち着きたい人々がよくお寺に見かけています。12日間の僧侶生活には、多くの外国人やラオス人と会いました。日本語が凄く上手なアメリカ人もいたし、以前に僧侶になった人もいたし、殆どの人は仏教に興味を持ち、お寺にてとても心を癒し、落ち着くと話してくれました。

シック（還俗）式：僧侶が俗人に戻ることに及びその逆にも、関係者よりの許可をうけないといけません。外国人が僧侶になるために、外務省等の許可が必要です。シック式はブアー式より、それほど複雑ではありません。5オンの僧侶と親戚の少人数で朝6時より約30分程度で実施しました。一般的にはシーム内（ブアー式と同じ）でシックしますが、私の場合はプラサンカラットのクッティにてシックしました。シックの後、処女が私を寺から連れ出す決まりがあります。ブアー式では母が連れて入りますが、シック式では処女が連れて去る厳しい決まりに関し、その訳が不明です。

この体験談を通して、多くの方にラオスの習慣及び仏教のことを理解して、小さいな知識になればと思います。今回のブアーが成功できたのは、多くの僧侶・方々よりサポートしてくれたこそ、できたものです。心より感謝しております。何より、私が受け取ったブーンを親に献上致します。そして皆様に幸せになりますように！

以上